

続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋のアイヌ語地名

第8回

○クオマナイ(川)

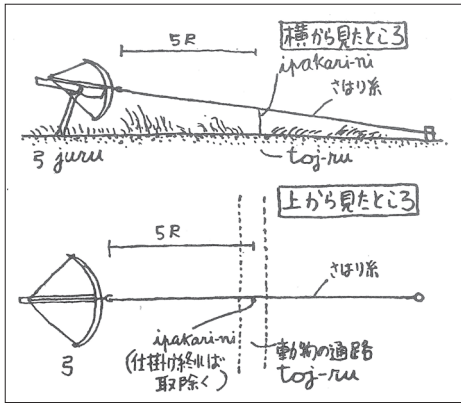
「クオマナイ」は、住良地区の南で庶路川から西へ向かっている川の名前です。「ク(弓)・オマ(ある)・ナイ(沢)」という意味から「仕掛け弓がある沢」と訳しています。

ク(弓)には「手に持つ弓」と「仕掛け弓」があり、地名のクは置く弓ということで、ほとんどの場合「仕掛け弓」を意味します。動物を捕獲するわなの一種で「アマッポ」と呼ばれます。

【参考】『知里真志保著作集3』
「地名アイヌ語小辞典」

■アマッポ

「アマッポ」は「アマ(設置して)・アク(射る)・ポ(小さいの)」という意味から「小型の仕掛け弓」のことを言いますが、普通は仕掛け弓の総称として使われているようです。



▶仕掛け弓の配置

その仕組みについて知里真志保博士は、動物の通り道から5尺(約1・5メートル)ほどのところに弓を置き、矢を道に向ける。弓からさわり糸を道に直角に交差させ、道の向こう側の木杭に結びつけておく。動物がこの道を進んで糸に触れると同時に矢が自動的に発射し、動物に刺さると説明しています。

明治期以降、銃が普及すると、この仕組みを使った「仕掛け銃」も使われました。

本町のアイヌ文化伝承者として、伝統的な狩猟や漁労に精通していた故根本興三郎氏は、「一番先に捕獲したヒグマを見たのは、俺が小学校を卒業した14歳の10月の時で、その年の春に生まれた仔馬がヒグマに取られたのを、アマッポの鉄砲で捕獲した時のことであつた」と、銃によるアマッポについて北海道教育委員会の調査で詳しく述べています。

【参考・引用】平成20年度アイヌ民俗文化財調査報告書『アイヌ民俗技術調査1〈狩猟技術〉』北海道教育委員会・『知里真志保著作集3』「樺太アイヌの生活」



○パナアンソーポコマナイ
○パナアンソーポコマナイ

「パナアンソーポコマナイ」は、住良地区にある下の橋付近で庶路川から西へ分かれていく川で、その分岐点から2・5キロメートルほどさかのぼったところで東に向かっている川が「パナアンソーポコマナイ」です。

「ソーポコマナイ」は「ソ(滝)・ポク(下)・オマ(そこにある)・ナイ(沢)」という意味で「滝の下にある川」と訳します。そして「パナ(川下側)・アン(ある)」、「ペナ(川上側)・アン」という対の表現によって、二つの川の位置を示したと考えられます。